

エステル

2023年
第37号

「いのちを愛し、幸いな日々を過ごしたい
と思う者は、舌を押さえて悪を言わず、
くちびるを閉ざして、偽りを語らず、
悪から遠ざかって善を行い、平和を求めて
これを追い求めよ。」

I ペテロ3章10節11節



温かい家族的“場”

人の言葉は、他者を祝福することもできるが、害を与え、不快にし、傷つけることもある。ハートフルトポスの理念・方針の中に「温かい家族的“場”作り」がある。ハートフルトポスのホームは家庭や家族のような場であり、そこで互いに話す言葉は、ホームの空気に大きな影響を産み出す。他人の悪口や批判、陰口は悪い影響を与える。たとえそれが病状であっても、放置しておくことは、ホームの雰囲気悪くする。職員の意識が法人の理念・方針からズレていることの故に、ホームの中で多くがそのままにされている。悪い言葉の種を蒔くと芽を出し、苦い根を張る。それが不信の実をならずと、傷つけ合ったり、心を汚し合ったりすることになる。不信感は、信じて向き合おうとする力を奪う。自分で感じるままに独自の解釈をし、より深い猜疑心を持つようになる。人間の中にある罪の性質が掻き立てられ、とんでもない方向に行ってしまう。互いの中に、祝福の言葉が満ちる時、ホームは喜びと幸せの雰囲気が満ちる温かい“場”（トポス）となるのだが。

特定非営利活動法人ハートフルトポス理事長

坪倉正史

[ハートフルトポス標語聖句]

わたしの目には、あなたは高価で尊い。
わたしはあなたを愛している。

イザヤ書43章4節

[2023年標語聖句]

眠っている人よ。目を覚ませ。死者の中から起き上がれ。
そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。

エペソ5章14節

ハートフルトポス方針

1. 私たちは、創造者なる神の目に、一人ひとりが高価で尊い存在であり、愛されている存在であると信じます。
2. 私たちは、一人ひとりの内にある優越性と可能性を信じ、相互支援の関係にあると信じます。
3. 私たちは、一人ひとりが自分の生活と人生に誇りと責任を持てると信じます。

ハートフルトポス理念

1. 信・望・愛の法則

信頼の法則

- ・互いの信じる力の回復を信じます。
- ・一人ひとりがキリストの光に照らされて輝くようになると信じます。

希望の法則

- ・一人ひとりが自分の存在に希望を持ち、生きる目的を回復することを信じます。
- ・一人ひとりが使命を持って生きていくことができると信じます。

愛の法則

- ・互いに愛(アガペー)を感じられる”場”トポス作りをします。
- ・互いに愛する(アガペー)喜びを持てるようになると信じます。

2. 温かい家族的”場”トポスづくり

- ・キリストの愛がホームに満ちあふれる”場”
- ・一人ひとりの責任の範囲が守られる秩序性のある”場”
- ・一人ひとりが自分自身をわきまえられる”場”
- ・一人ひとりがいいわけを必要としない”場”

この9月、今年の3月から入院していたYさんがシオンに帰って来ることができました。入所された当初はまだ年若く、表情も硬かったYさんが、ハートフルトボスに来て生活が安定し、イエス様と出会い、救いを受け、教会でみことばによって養われ、日に日に明るく表情豊かに、いきいきと生き返っていくような様子は、私たちの励ましでもありました。

そんな中での突然の入院は、本人にとってショックだったと思いますし、私たちにとってもショッキングでした。

面会にも応じられないほど病状が悪化し、退院の目処も立たず、いよいよ今後どうしていくかという時、Yさん自身がドクターに「シオンに帰る」と言ったそうです。

その時のYさんはまだまだ不安定な状態と聞いていましたので、自分で「シオンに帰る」と言ったということが信じられませんでした。しかし今までの生活の中で、その大切な部分の多くを担われている大好きな牧師夫人（理事長代理）との思い出が、彼女の大きな支えになったのだと思います。

牧師夫人のサロンルームで、お手製の英国菓子や素敵な紅茶をいただいたこと、イースターやクリスマスのお祝いをしたこと、聖書のお話を聞いたこと…。

Yさん自身が、日々の自分の変化に驚いていました。日常の悩みも、自分で決断し「人を励ます方を選ぼう」としていました。それらの大切な思い出のひとつひとつが「シオンに帰る」という彼女の言葉につながったのだと思います。

そしていよいよ退院の日、牧師夫人がお花とお手紙を用意してくださいました。

退院になったとは言え、長い入院期間を経てのシオン。不安で一杯といった表情のYさん。「おかえりなさい！」の声とともにお花を受け取った瞬間、彼女の表情が、不安から喜びいっぱいになりました。そして受け取ったお花をその場にいた職員達、この日を心待ちにしていたメンバー Sさんに見せ、「牧師夫人からいただきました。嬉しいです！」と明るい声で言いました。

そしてYさんは、そのお花を玄関の一番目立つ場所にそっと置いたのです。その姿は退院直後とは思えないほど、喜びと優しい気遣いに溢れていました。

「誰でもキリストのうちにあるなら、その人は新しく作られたものです。古いものは過ぎ去って、見よ、全てが新しくなりました。」 第二コリント5章17節

今回の入院はYさんにとって、ある意味挫折であったかもしれません。心の回復の途中に、突然訪れた闇のように感じられたかもしれません。しかし、その暗闇を乗り越え、光の中に戻った彼女は、以前よりもさらに輝き、感謝と喜びにあふれて歩まれて行かれることでしょう。これからまた、自分の内面との戦いの日々が待ち受けているかもしれません。葛藤することもあると思います。しかし、みことばを信仰をもって握って生きていくなら、どのような状況にあっても、感謝と喜びを持つことができます。退院の日、喜びの中でYさんは言いました。「退院できてびっくりしました。シオンに帰るのは、もっと遅くなると思っていた。こんなに早く帰れるなんて…！」

「人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなた方が満たされますように。」 エペソ3章19節

◆ 2023年ハートフルトポス一泊旅行◆
和歌山県 南紀白浜温泉・アドベンチャーワールド
5/17 ~ 5/18



5月17日朝8時15分二条駅西口ロータリー集合。貸し切り大型バスに乗り込み、期待に胸を膨らませ、京都を出て和歌山方面へと向かう。坪倉理事長が朝の挨拶と共に、この一泊旅行の祝福を祈られた。私自身も、私たちキリスト者を通して、イエス・キリストの愛を伝え表すことができますようにと祈る。

最初にバスが向かったのは、南紀白浜リゾート、ホテル川久。紺碧の海を背に突如現れたヨーロッパのお城のような美しい建物に、思わずバスの中からメンバーのどよめきが上がる。バブル期に400億円をかけて建設されたというホテルだけあって、これでもかと贅を尽くした感が半端ない。外観もさることながら、特筆すべきはエントランスホール。きらめく金箔のドーム型の天井とそれを支える24本の円柱、職人業が美しいモザイクの床、ベネチアングラスのシャンデリア、フロアに置いてあるのは、特注のスタンウェイのピアノ。どこを撮っても絵になる、まさしく『映える』ホテルだ。

到着してすぐに、エントランスにて全員で記念撮影を行い、その後は、メインダイニング『フォルナーチェ』でのフレンチコースランチ。素晴らしいロケーション、見た目にも美しく、味も最高の食事の後、メンバーと職員が理事長の元につめかけ、口々に感動と感謝を伝える。初日の最初から、日常では味わえない特別な空間にいて、みんなの表情は、華やぎ明るく輝いている。



ランチの後は、グループに分かれて、川久ミュージアムを見学する。驚いたことに、通路の壁の両側に何気なく飾られている絵画が、シャガールやダリ、横山大観など、誰もが知る有名画家の絵なのだ。ハートフルトポスには絵を描くメンバーが多くいるのだが、名画をこんな至近距離で心ゆくまで鑑賞できるのは、貴重な体験だったに違いない。

名残を惜しみつつ、ホテル川久を後にし、宿泊先である、南紀白浜温泉ホテルシーモアに向かった。15時到着。実はホテルに着いてから夕食までが、旅行の中で職員が一番忙しい時間帯だ。メンバーが海に見える温泉を満喫している間、舞台付きの宴会場では、メンバーが毎年一番楽しみにしているといっても過言ではない職員劇のリハーサルが行われる。

今年の職員劇は、聖書の第二列王記5章、ナアマン將軍を題材とした劇。演じる役者を替えての再演となる。脚本、監督、演出は理事長自らが行い、配役された職員は数ヶ月前から本格的に練習し、さながら本物の役者のように、セリフを覚え、動きを付けて、葛藤しながらも真剣に役作りを行う。



1日目：二条駅集合、出発8:45 → ホテル川久にてフレンチのコースランチ12:00 →
川久ミュージアム見学 → 南紀白浜温泉ホテルシーモア15:00 → 温泉を楽しんだ後、
宴会場で日本料理の夕食18:00 → 職員劇と理事長メッセージ → 消灯22:00



2日目：朝食後、ホテルシーモア出発9:30 → アドベンチャーワールド到着9:50 →
班ごとで自由行動(昼食) → 集合、京都へ出発14:00 → 二条駅にて解散17:30

リハーサルの後、セリフに不安のある職員が、「私には無理です」と思わず吐いた弱音を耳にし、この後に及んで何を言っているのかと叱咤激励しつつ、イエス様が働いてくださるからと伝え、彼女の為に祈る。その後、夕食開始の寸前まで一緒に練習を続けた。

夕食は、和歌山の山海の幸がふんだんに使われた和懐石。場が沸いたのはアワビの石焼き。人生初アワビという方も多く、あちこちで歓声上がる。

食事を楽しみながら、チーム対抗の出し物合戦が行われた。メンバーも職員も、この時の為に何週間も前から準備し、練習してきたガチのバトル。コントあり、歌あり、ダンスあり、内容もバラエティにとんでおり、どこが優勝するかわからないほどの接戦となる。結果発表は翌日のお楽しみで、勝てば豪華な賞品が出るので、皆真剣だ。あるチームでは、直前に調子を崩したメンバーが、出ないと言い出すハプニングが起こる。はい、そうですかと簡単には言えない。なにしろ彼が主役なのだ。同じチームのクリスチャンメンバーが彼のまわりに集まり、励まし、落ち着くように祈る。「やっぱり僕、出ます」の言葉に全員で、ハレルヤ！と歓喜する。

食事でも終わり休憩後、舞台の前には椅子が並ぶ。ここからハートフルトポス一泊旅行のメインともいえる職員劇と理事長メッセージへと続く。

以下は職員劇のあらすじである。

イスラエルに勝利したアラムの大將軍ナアマンは、国王にも重んじられ、人民にも尊敬されていた。成功者であるはずのナアマンだったが、不治の病である重い皮膚病に悩み、虚しさの中にあっただ。そんな中、將軍ナアマンは捕虜となったイスラエルの娘から、祖国には病を治す預言者がいることを聞き、戦車と贈り物をたずさえ、預言者エリシャのもとに向かう。しかし、エリシャは出て来ず、かわりに出て来たエリシャの使いからは、「ヨルダン川に行き、七度、身を洗いなさい。そうすればあなたの身体は元どおりになってきよくなる」という伝言のみ。激怒するナアマン。しかも川で身を洗うには將軍服を脱ぎ、醜い皮膚病を兵士たちの前でさらさなくてはならない。怒り心頭のまま、ナアマンは国に帰ろうとする。そんな中、命を懸けて、ナアマンの部下が進言する。「あの預言者がもしもむずかしいことをあなたに命じたとしたら、あなたはきっとそれをなされたのではありませんか。」その言葉に打たれ、主の預言者の言葉に従い、裸になり、ヨルダン川にその身を浸したナアマンは、重い皮膚病が癒されるという奇跡を体験し、イスラエルの神が真の神であることを知る。





将軍ナアマンが神の前にへりくだり、ヨルダン川に身を沈め、いやされるクライマックスシーンは、全員が身じろぎもせず、舞台上に魅入っており、終幕後は、大きな拍手に包まれる。演じた職員全員が喜びに溢れ、両手を上げてカーテンコールに答えた。職員劇の後に続く理事長メッセージは、ナアマン将軍の劇から、主の前にへりくだるといことについて語られた。終了後はメンバーや職員が、劇やメッセージを通して自分がどんなことを感じ、何を受け止めたかをそれぞれに語り合う濃密な時間となった。もし自分がナアマンだったら、ナアマンの部下だったら等、劇中の登場人物に自身をあてはめ、自分の中にある高慢さや罪について考える機会となった。

翌朝、同じ宴会場で豪華な和朝食を取りながら、あちこちの席から、昨夜の劇の話題になり、職員はその感想を聞くことで、改めて劇をやり遂げた感動を胸にし、二日目がスタートする。

二日目の行先は、南紀白浜アドベンチャーワールド。四つのグループに分かれて、皆で話し合っ決めてそれぞれのルートで、パンダやイルカショーやサファリを思いきり楽しむ。

一日目よりも親密さを感じ、互いが大切な仲間であるという感覚が皆の中で増していた。楽しい時間はあっという間に過ぎ、やがて集合時間になり、京都へと出発する。帰りのバスの中では、多くのメンバーが今年の旅行がいかに楽しく、素晴らしかったかを口にし、感謝と共に笑顔で思い出を語っていた。

私は人を笑顔にする旅が好きだ。若い頃は、世界中を旅していた。それは、ある意味、自分が生きる目的を探す旅だった。しかし、イエス・キリストに出会い、救われた今はわかる。世界中どこに行こうと、生きる目的など見つかるわけではない。なぜなら、私の人生の目的は、私を愛し、私を造り、この世に送り出して下さった創造主なる神だけがご存知だからだ。

この一泊旅行の中では、様々なドラマが生まれ、記憶に残る素晴らしい旅となった。たった一泊なのに？と言うなかれ。ハートフルトポスの一泊旅行は、英語で言うところの短い旅-Trip-ではない。おおげさに聞こえるかもしれないが、イエス・キリストによって人生が変わるきっかけとなる-Journey-の始まりなのである。

N. Masuyama

「あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。
もしあなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。」

エレミヤ29章12～13節

Ecclesia

2023年4月1日、エクレスシア館が開所した。桂川の河川敷に程近い自然豊かな西京極の地に建てられたこの新しいホームは、定員10名、ショートステイが一室あり、入居する8名は同じハートフルトボス内のホーム、ノアとエリヤ館からの転居組。残りの2名は新入居者で、そのうちの一人がホーム最年少となる彼だった。

彼は開所の二日目に、春一番のようにやってきた。初めて会った時の彼の印象は、迷子の子供そのもの。どこか寂しそうで、表情も暗く、不安なのか、そわそわして落ち着きがない。それもそのはず、彼はその重い障碍故に 大好きな母親と一緒に住むことが難しい状態になり、ハートフルトボスに来ることになったのだから。

なぜ自分はここにいないてはならないのか？ なぜ家に帰れないのか？

その理由がわからない彼は何度も勝手にホームを飛び出した。その度に、職員は必至で追いかける。見失ってしまった時には捜索願を出し、警察に保護され戻ってくることも度々だった。かくゆう私も、逃げる彼を追って、心臓がつぶれそうになるまで走ったことも一度や二度ではない。そんな時、彼の目の奥には、どうしようもない憤りと悲しみが渦巻いていた。その暗い炎のような感情が一旦爆発すると、彼は大音響で音楽をかけて踊り、大声で泣き叫び、暴れ、あろうことか新築のホームのトイレのドアや廊下の床や壁を壊してしまった。それに逐一对応するホーム職員も次第に疲弊していき、このまま入居し続けるのは難しいのではという空気が流れ始めた。

しかし、そんな中にも希望はあった。それは同じエクレスシア館に住むクリスチャンのメンバーと彼との関りだった。彼を日々見守り、優しく声をかけ、時には叱り、何かと面倒を見てくれる家族のような仲間。次第に彼が心を開いてきていることがわかった。特に、常に彼を気にかけて、姉のように面倒を見てくれていたある女性メンバーの存在は、彼にとって日々の大きな支えとなった。彼の中に少しずつ変化の兆しが見え始めた。

音楽が好きでダンスが大好きな彼は、ホーム内で流れる賛美や、リハビリフェローシップで歌われる賛美を喜んで聞くようになり、時には曲に合わせて楽しそうに踊るようになった。そして、一緒に行きたいと自らが望んで、日曜には礼拝に参加するようになり、クリスチャンメンバーが集まって祈る時には自ら側に寄り、元気な声で「アーメン！」と言うようになったのだ。

こうしてホームでの生活になじんできた彼だったが、それでも問題は起こった。彼は職員の間を盗み、こっそりホームを抜け出して、近くのコンビニやドラッグストアから勝手に商品を持ってきて食べてしまった。不穏を抑える為に処方された抗精神薬の副作用で、異常に増してしまっただけが原因だった。これが続けばホームに住み続けることはできない。事態は深刻だった。それを受け、入居の時から関わっていたクリスチャンの男性職員が父親的な立場から厳しさの中に優しさを込めてはっきりと「ダメなものダメ」と叱り、ハグした。

叱られたことで彼が荒れることはなく、涙ぐんでしょんぼりしていた。

*Since you are Precious and Honored in My sight,
and Because I love you.*

Isaiah 43:4



それでも数日後には同じことをしてしまった彼に対して、今度はホームで日々の生活を支援している私が、母親的立場で本気で叱った。

あなたがエクレシア館にきたのは決して偶然ではない事、イエス様があなたを本当に愛しており、ここに置いてくださった事、ホームはあなたの家であり、ホームメンバーは家族であり、一番年下のあなたは大切な末っ子であること。

私が管となり、彼の中にイエス様の愛が流れますようにと祈りながら伝える。話すうちに、自然に涙があふれてきた。

最初はバツが悪いのかふざけていた彼だったが、次第に真剣な顔になり、「今から一緒に謝りに行きます」ときっぱりと伝えると「はい」と頷いた。店に謝罪に行く前には、彼の面倒をいつも見てくれている彼女が彼を励まし、イエス様が働いてくださるようにと祈ってくれた。店の中に入ると彼は緊張した面持ちだったが、とても素直に「ごめんなさい。もうしません」と店長に伝えることができ、代金を支払い、許していただけた。

エクレシア館への帰り道、一緒に彼の好きな賛美を歌いながら、イエス様に感謝しつつ、「さあ、おうちに帰りましょうか」というと、「うん、帰ろう」と大きくうなずいた彼の顔は明るく輝いていた。

以後、彼は日を追うごとに変化し、落ち着いて生活できるようになった。薬の処方も変わり、今ではもう以前のように、荒れることはほとんどなくなった。ホームに来たばかりの時の不安そうで寂しそうな暗い表情は消え、愛嬌のある明るい笑顔に変わった。

最初は問題ばかりに目が行きがちだったが、彼には人を気遣うやさしい心があり、素直で明るくひょうきんで、まわりを元気にする力があつた。自分はここにいる皆から愛され大切にされているという実感が彼を安定させ、良い面が前に出るようになったのだ。

ある時、リビングで賛美にあわせて踊る彼に対し、クリスチャンの彼女が、「イエス様のこと好き？」とたずねた。彼は「好き！」と大きな声で答えた。「わたしたちもあなたのことが大好きだよ」「うん！」頷く彼は本当に嬉しそうだった。

『誰でもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。』

第Ⅱコリント 5章17節

愛ある環境の中で、今、彼は、イエス様が造られた通り、愛される者として、エクレシア館に根付こうとしている。イエス様の愛と恵みに感謝します。

Naoko.M

Ecclesia